ルーリー部長はいつも朝食にうるさくて、朝食のためなら前の晩の仕込みにいくら時間をかけても飽きないようです。

「ワッフルの美味しさは、『ワッフルメーカー』の温度で決まる。『ワッフルメーカー』をここでは『祝福の神器』と呼ぶことにする。この、祝福の神器の温度の調節がいかに絶妙かが大事なわけだ」

わたしとしては、ワッフルが食べられたらなんでもいいやって思っていたのですが、ルーリー部長はそれを追及させることに命を燃やしているようです。

「アルメリア！！何度言ったらわかるんだ！祝福の神器の温度が熱すぎるだろが！」

「ひいぃぃ～！ご、ごめんなさいぃぃ」

ルーリー部長がわたしに向かって烈火のごとく怒っています。

「これではワッフルの生地が鉄板にくっつくだろうが！俺の朝食を台無しにする気か！朝食をなめてるのか、朝食を冒涜しているのか、食べられたらなんでもいいと思っているのかっ！」

「い、いいえ！その、す、すみません～！！」

ルーリー部長にわたしはいつも怒られてばかり。

部長がこんな感じだから、部員はわたしを含めてたったふたりだけなのです。

「まったく温度の管理もできんのか、おまえは。ほら、俺が作ったやつをたべてみろ」

「は、はいっ。い、いただきまぁ～す」

怒りっぽくて、神経質で、朝食のことしか頭にないルーリー部長率いる、この私立アーガス・リングス朝食部にわたしが在籍している理由。

それは、

「お、お、お、おいしいいいいいですぅぅ〜！！」

ルーリー部長の作る食事は、いつも頬っぺたがとろけるくらいおいしいのです。

彼の食事を食べてしまったら、他のイギリス料理がウサギのフン以下に思えてしまうのでした。

「ルーリー部長、は、はぅ、お、おいしいです〜！も、もう一口ください〜」

「何言ってんだ、これは俺のだ。誰にもやらん。祝福の神器を正しく扱えないお前には、そこの皿に横たわっている、冬のエディンバラ城の外壁並みに固くなったワッフルがお似合いだ」

「そ、そんなぁ〜」

こうやって一口でも彼の料理を味わえるだけでもわたしは幸せなのですが、あえて言うならもっとたくさん食べさせて欲しいものです。

「あ、あの、コーヒーを淹れるので、ちょっとだけ部長のワッフル分けてくれませんか！？」

「ふん、まぁ、お前の作るコーヒーは多少まともだからな。さっさとしろ」

「は、はい～！」

わたしの父は地元でバリスタをやっており、その影響でわたしもコーヒーの淹れ方には多少知識がありました。

コーヒーに関してあまり怒られることはないのですが、しかしひとたび朝食となると全然だめなのです。

わたしがコーヒー豆を選んでいる間、ルーリー部長はとい

うと、フォークでワッフルを食べながら新聞を読んでいます。

透き通った鼻筋、薄く繊細な口唇、瞳の色は茶色でやや切れ長。

わたしがこのアーガスト・リングス学園の朝食部に所属しているもうひとつの理由。

それは、ルーリー部長はわたしの理想の外見にドンピシャなのでした。

まるで漫画のイケメンキャラが本から飛び出してきたんじゃないかって思ってしまうくらいの透明感。

料理上手（朝食に限る）でイケメン。

料理が壊滅的に下手な両親のもとで育ったわたしは、恋人にするならぜったい料理上手のイケメンと決めていました。

「こ、コーヒーお持ちしました」

ルーリー部長は運ばれてきたコーヒーを新聞から目を離さずに静かにすすります。

一口飲んで、小さく息を吐くと、もう一度、口に運びます。

「あ、あのぅ。ルーリー部長、わ、ワッフルを」

「ん？」

「あ、いえ、その、ワッフルを、食べたいなーって」

「ワッフルならそこの、地下鉄の地面みたいに固くなったのがあるだろ」

「う、うぅ、ひどい。」

「はやくその小麦粉の塊を片付けろ」

「いえ、あの、そのっ、部長のワッフルを食べたいなーって」

「あー。今全部食べ終わった。我ながら最高の出来上がりだ」

「ひ、ひどいいぃ～」

わたしが泣き崩れているのを他所に、部長はエスプレッソをおいしそうに味わっているのでした。

するとそこに、

コンコン。

部室のドアを叩く音が聞こえます。

「やっほー。お邪魔するよ～」

そう言って現れたのは、学園の制服を着た、ブクブクと

まん丸体系の、髪をカールに伸ばした、太った醜い男子生徒でした。

「アルフレッド！」

わたしはびっくりして思わず叫んでしまいました。

ルーリー部長はというと「なんだ、おまえか」と一瞥し、すぐに新聞に戻ってしまいます。

アルフレッドは陽気な調子でルーリー部長に話しかけます。

「ルーリー・ラシュデン、キミはまーたそうやって新聞読んでるんだね。スマートフォンで最新のニュースが読めるのを知らないのかい？」

「オレの優雅な朝食を邪魔しに来たのなら、いますぐ死んで砕けろ」

「おおー、こわっ」

と言ってアルフレッドが肩をすくめますが、あまり動じる様子はありません。彼は校内で数少ないルーリー部長に軽口を利ける人物のひとりなのです。

「ルーリー。いつもの依頼が届いているよ」

アルフレッドがフレンドリーにルーリー部長のそばに寄っていきます。脂肪を蓄えた下あごが揺れていて、見るに堪えません。

「どの相談役もお手上げでさ。たしかにやっかいな事案ではあるんだが」

「今、朝食の余韻を味わっている最中だ。あとにしてくれ」

「ふふ、まぁ、そう言わずに。なにせ今回の依頼は、あのビッグカップルの大ケンカを仲裁してほしいという案件さ」

「む？」

ルーリー部長は、その切れ長の目をアルフレッドに向けました。

ルーリー部長には、アーガスト・リングス学園朝食部の部長という肩書のほかに、実はもう一つの顔がありました。

『過激派恋愛相談係』

それが、ルーリー部長のもうひとつの顔なのでした。